

会員からの声

普及員のひとりごと

寺見 裕

北留萌地区農業改良普及センター

後2年で今世紀も終わり、子供の頃テレビで「鉄腕アトム」を見ながら空想していた21世紀が現実のものとなりつつあります。ヨサコイで踊り狂うほどでないしろ、何か心騒ぐものを感じます。

それは、必ずしも子供の頃に想った浮き浮きする気持ちとは少し違い、不安やあせりにも似た思いかもしれません。「何とか間に合いました」と言うテレビコマーシャルがありますが、農業の現場では「間に合うのだろうか？」と言うのが次の世紀を迎えるにあたっての正直な気持ちです。

1. 酪農専業地帯における地域課題

北海道の酪農にとっての諸問題は、現在、日本農業が抱えるものと程度の差こそあれ、本質的には変わらなくなっています。その本質とは、戦後半世紀の目覚ましい技術革新と生産拡大、結果として構築された農業体質・体制を変革しつつ、次の世紀にソフトランディングさせることの難しさから発生しています。

もちろん、北海道は北海道なりの、酪農専業地帯は地帯なりの特有な問題を抱えてはいますが、そうした問題解決のための課題を集約してみると；

- 1) 農業・農家所得の確保
- 2) 農業後継者・担い手の確保
- 3) 労働過重からの脱却
- 4) 経営管理能力の向上
- 5) 周辺環境への配慮、などが上げられます。

この中では特に、農業改良普及の現場においては酪農家の将来にわたる所得確保が大きなテーマとなっています。

すでに、価格政策の変更と品質格差による牛乳単価の低下と牛肉市場価格の低迷による酪農家所得の急激な減少は始まっており、将来の国際競争に対応するためにはさらに価格低下は避けられない状況です。

こうした中、牛乳生産現場では品質の向上が第一の技術課題となっています。すなわち、他産地より良いもの、売れるものを生産し農業収入を確保しようとする戦略です。

さらに、低コスト化による農業所得確保の取り組みも見られます。北海道の酪農生産においても、購入飼料費は最も大きな費用項目です。その低減のために、従前の農協・系統からの配合飼料購入体制から、商系

からの配合・単味飼料の利用へと変える動きも目立ってきました。

また一部には、乳製品製造や農家民宿など多角経営化による農家所得確保への模索も見られますが、大規模・専業率の高い北海道の酪農経営では、労働の確保がひとつの障害になっています。

2. 課題解決のために普及現場は

普及センターではこれらの地域課題の解決策として、適正な飼養管理技術の普及実践により収益性の向上を図るという基本的な手法に加えて、経営診断に基づくコンサルテーションやカウンセリングという手法を強化し、成果を上げようとしています。

「厳しいときには経営を」という普及事業半世紀の前例に従ったと言えばそれまでですが、厳しさが酪農を育ててきたことも事実ですから、私たち農業改良普及員の大きな活躍の時代とも考えています。

ただ、私個人としては、課題解決のための技術対策の点において、地域特性を反映しきれないというジレンマを感じています。一例としては、草資源が比較的豊富な天北・根釧地域の普及センターにおいてさえも、放牧などの牧草利用性の向上による収益性改善というテーマが必ずしも普及センター全体では一致して取り組めないことです。

3. 試験研究への苦言

地域特性が反映されない技術体系という点では、試験研究分野の方々にも、ぜひ考えていただきたいと思っています。

新鮮味のないテーマや地域限定のテーマでは研究予算が付かない、オリジナルティのないテーマでは博士号が取れないという構造的な問題もあるのでしょう。

未来に向けた基礎的な研究も重要ですが、現実的な試験課題も平行して行う能力が求められています。研究者の中には、変化する農業現場への対応が遅い方も多いのではと不安を感じることもあります。

現場にも来ないで、データだけ送って下さいという依頼が希にありますが、データが生まれる生産現場に対する認識がなくて、いかなる分析と考察が出せるのかはなはだ疑問であります。

4. おわりに

とは言っても、私が普及活動に行き詰まったときに頼りにしているのは、実は、試験研究の方々なのです。期待するあまりの苦言と理解下されば幸いです。それ

にしても、今の農業、これからの農業を論じ合い、それぞれの仕事に活力が生まれる場が少ないように思います。もっともっと、フィールドで出会えるように願っています。